

かじわら よういち

梶原 洋一

文化学部 助教

博士(歴史学)/リヨン＝リュミエール第二大学(フランス)
／東京大学大学院

ホームページ URL

<https://researchmap.jp/yoh-kaji/>

主な研究業績

- 「中世ドミニコ会における大学学位取得－アヴィニョン大学神学部を中心に」『史学雑誌』、128 編 4 号、2019 年、34-58 頁
- "Université et éducation dans l'ordre dominicain à la fin du Moyen Âge : Le collège de Notre-Dame de la Pitié d'Avignon", *Annales du Midi*, 128 (2016), pp. 247-267
- 「中世末期におけるドミニコ会教育と大学－アヴィニョン『嘆きの聖母』学寮の事例から」『西洋中世研究』、5 号、2013 年、123-138 頁
- 「中世後期南フランスにおける大学神学部と托鉢修道会－トゥールーズとモンペリエの事例から」『地中海学研究』、33 号、2010 年、25-46 頁

研究テーマ Research theme

中世ヨーロッパにおける
大学学位の社会的意義についての研究

概要 Overview

今日世界中に拡大している大学制度（ユニヴァーシティ）は、13 世紀のヨーロッパにおいて神学や法学の専門教育を生業とする教師と、彼らの元に集まった学生たちが自ら法的地位と権利を守るため結成した同職組合（ユニヴェルシタス：ラテン語）に由来しています。学位や卒業資格というものは、元々こうした組合の一員として授業料を取って教鞭を執るための一種の営業資格、すなわち教授資格を意味していました。しかし、大学で学ばれる高度な知識はやがて社会の他の部門－国家行政、法律実務、聖職者の様々な活動など－においても必要とされます。その結果、教授資格＝学位は社会的上昇（あるいはすでに獲得している社会的地位の保持と補強）の有効な手段となっていくます。

このように、中世ヨーロッパがいわば「学歴社会」化していく歴史的過程を制度、社会、文化、心性などの視点から多角的に解明することが本研究の目的です。その意義は、ひとり古い時代のヨーロッパ史の知られざる一側面を明らかにしていく、という点にとどまりません。すなわち、日本を含めた現代世界において大学や専門知と社会がとり結ぶ関係が改めて問い直されるなか、こうした巨視的な議論に具体的かつ有益な考察材料を提供することをも企図しています。

もちろん、このような巨大なテーマに取り組むには焦点を絞った研究対象を設定することが不可欠です。本研究では、大学とほぼ同時期に誕生し、旺盛な説教行脚を通じてヨーロッパの人々の信仰、文化、考え方に重大な痕跡を残した「托鉢修道会」と呼ばれる修道士グループに注目します。キリスト教の教義と道徳を民衆に普及するための辻説法を活動の柱とした彼らは、そのため教義についての深い知識を必要とし、大学でも学びました。その結果修道士にも学位保持者が増えていきますが、このことは彼らの組織、行動、思想に甚大な影響を及ぼしました。まさに托鉢修道会は、中世の学歴社会化を観察する格好の観測点と言えるのです。本研究は、修道会と学位の関係を、当時の公用語であったラテン語で書かれた様々な文書（その多くは未だ羊皮紙のまま、ヨーロッパ各地の文書館に眠っています）を解読、分析することで多面的に描き出します。



アヴィニョン（南フランス）の文書館にて古文書調査



14 世紀ボローニャ大学の講義風景を描いた写本挿絵

応用分野 Application areas

本研究は主として歴史学分野に属するものですが、大学を主題とするため、例えば教育学、社会学などの諸分野にも応用が可能でしょう。加えて、中世ヨーロッパ以外の時代、地域（日本史、東洋史など）における知と社会の関係を対象とする研究との対話も、極めて有益でしょう。

共同研究等へのニーズ Need for joint research

上述のような広く「知と社会」に関わる研究に参画することに加え、キリスト教聖職者である修道士を主たる対象とする本研究は、ひろくヨーロッパの宗教文化や社会を扱う共同研究において重要な貢献をなすものと考えます。